

上杉和央報告と渡辺理絵報告によせて

山 近 博 義

I. はじめに

今回のシンポジウムでは、近世の絵図・地図は2つのセッションに分けられていた。そのうち《近世Ⅱ》では、日本図と城下町絵図という、空間スケールも性格も異なる絵図・地図が取り上げられた。考証家の作製した日本図を取り上げたのが上杉和央氏であり、行政資料ともいえる城下町絵図を取り上げたのが渡辺理絵氏である。各報告の具体的な研究対象は異なっているが、いずれも、絵図・地図を史料群として扱っている点で共通点を見いだすことができる。

日本に現存する前近代の絵図・地図の中で、近世絵図・地図の特徴の一つに、その数の多さをあげることができよう。ある特定の絵図・地図を取り上げても、当該の図に関連する絵図・地図、さらには他の史料にまで目配りをすると、多数の史料が現存している場合も少なくない。したがって、個々の絵図・地図を単独で扱うのではなく、各々を史料群の中で考えなければならない場合が少なくない。そして、そのことにより、絵図・地図を出発点に、新たな論を展開できる可能性がみえてくることもある。両氏の報告は、その具体例を示してくれた点で意義のあるものであったと考えられる。

以下では、まず、両氏の報告内容を具体的に振り返り、その後、史料群としての近世絵図・地図について、若干のまとめをすることにしたい。

II. 上杉報告によせて

まず、上杉氏の報告は、森幸安の地図史上の位置づけを明らかにしようとするもので、氏による一連の森幸安研究の一端をなすものであった。この報告で具体的な対象とされたのは日本図である。そして、日本図に経緯線を表現するという発想が、森幸安から長久保赤水に継承されたことを明示することに主眼が置かれていた。いわば、江戸時代後期の日本における地理思想伝播の一端を明らかにしようとするものといえよう。

この考察の過程では、小野寺氏によって近世絵図史料論の一課題とされている「写す行為」の研究¹⁾がなされている。そして、赤水と幸安との間で「写す行為」を可能にした背景として、18世紀の大坂における知識人たちのネットワークの存在、および、そのネットワークを通じた地図収集、貸借などの関係²⁾の存在が指摘されている。

この場合、「写す行為」、さらにはその背景にある人的ネットワークを通して関係性の生じた絵図・地図などを、史料群としてとらえることになる。そして、史料群に属する絵図・地図などの関係性を明らかにしていくことで、地理思想伝播の解明へと道筋が開かれることになるであろう。

さらに、上杉報告では、今後の課題として、幸安が構想していた「日本志」の全体像解明という点があげられている。この点も上杉氏により徐々に明らかにされつつあり³⁾、幸安作製の地図を個別に扱うのではなく、彼

の構想していた地理学全体の中で位置づけていくことの重要性が指摘されている。この場合、史料群としては、地図のみではなく、少なくとも地誌も入ってくるであろう。

Ⅲ. 渡辺報告によせて

つぎに、渡辺氏の報告は、城下町絵図を対象に、その新たな研究の可能性に関して論じたものであった。渡辺氏は、米沢などを対象に、城下町絵図と城下町の武家地に関して、一定の成果をあげておられ⁴⁾、今回の報告もそれを踏まえたものと考えられる。

渡辺氏の報告では、個別の城下町絵図を単独で扱うのではなく絵図群として扱う点、そして、「現用資料としての絵図」という観点を重視している点が、重要と考えられる。「現用資料としての絵図」とは、絵図あるいは絵図群がどのように利用されたかに着目する観点であるといえよう。そして、絵図の描写内容や文字記載、さらには関連史料などから利用の実態に迫っていくことが求められている。

また、「現用資料としての絵図」という観点から、大家の性格により、城下町絵図群にも差違が生じるという指摘がなされている。具体的には、転封の有無による城下町絵図群の差異が、試論として示されている。

絵図・地図を、利用の側面も加味して、把握していくことは重要なことであろう。もちろん、すべての絵図・地図で、利用実態の解明が可能というわけではない。しかしながら、従来の絵図・地図研究において、利用の側面には、さほど光が当てられてこなかったように思われる。

さらには、「現用資料としての絵図」という観点から絵図・地図群を見直すことで、新たな研究を展開できる可能性も出てこよう。渡辺氏の報告では、このような例として、城

下町絵図を出発点に、それらが作製されるに至った都市空間、都市社会の解明へとつながる可能性が示唆されている。渡辺氏自身の既往の成果を含め、絵図・地図群を足がかりにした近世都市研究の新たな展開として評価できよう。

もっとも、絵図・地図群から、都市空間、都市社会を総体として把握することは、かなり困難なことであろう。絵図・地図群から明らかにし得るのは、あくまでも、当該の図が描写した都市の一部分、たとえば武家地等であろう。

Ⅳ. おわりに

両報告は具体的な対象こそ異なるものの、個々の絵図・地図を単独で扱うのではなく、いずれも史料群として扱っている点は共通している。また、史料群としての絵図・地図を出発点に、上杉氏は地理思想史へ、渡辺氏は都市論へと、各々新たな研究の展開を見据えている点でも共通している。

最後に、史料群として絵図・地図を扱うことについてまとめてみたい。多くの絵図・地図は、単独で完結した存在であるよりも、他の絵図・地図、さらには地図類以外のさまざまな史料と関係をもちながら、作製され、利用されてきたことであろう。史料群として絵図・地図を考えるということは、この関係性の中で、個々の絵図・地図を考えていくことであるといえよう。

このような関係性の中で絵図・地図を検討することで、当該の図の理解も深まることであろう。さらには、それらが作製され利用されるに至ったさまざまな背景にまで、論究しうる可能性も出てくる。両報告は、その可能性も示唆してくれており、今後のさらなる研究の展開が期待される。

(大阪教育大学)

〔注〕

- 1) 小野寺淳「近世絵図史料論の課題—国絵図研究会の活動を通して—」, 歴史学研究 842, 2007, 25～32頁。
- 2) 上杉和央「18世紀における地図収集ネットワーク—大阪天満宮祝部渡辺吉賢を中心に—」, 地理学評論80-13, 2007, 823～841頁。
- 3) 上杉和央「森幸安の地誌と京都歴史地図」(金田章裕編『平安京—京都—都市図と都市構造』京都大学学術出版会, 2007), 99～121頁。
- 4) 渡辺理絵『近世武家地の住民と屋敷管理』大阪大学出版会, 2008。